牧草と園藝

雪印種苗株式会社

4

自由、共産両陣営とわが国の酪農問題

◇酪農政策の問題点を主題にして◇

田垣住雄

最近の諸情報を見ると、自由、共産の両陣営では、農業事情に応じて、全く似て非な課題が擡頭している。これは今後の酪農推進に、相当参考になる点があるので、その概略を述べて、今後の酪農対策に資したい。

1　自由陣営の酪農とわが国の酪農

自由諸国の酪農事情は、常に報道されているから、だれしも事情に通じているので、改めて述べる必要はない。自由競争の盛んなことによって、どの国でも良い乳を安く作るために力を入れ、また営農を改善し土地生産力を増大し、酪農を主軸として農業の遅れを取り戻し、農産、畜産の総生産力をあげて、土地生産性及び労働生産性を向上発展することに農政が指向されている。

このような農政では、いろいろな施策が採用せられているが、農業基盤の拡張と、土地能力の高度利用とを図るため、とくに牧草農業が重視せられ、多根な牧草（禾本科）よりも深根な牧草（豆科）が着目せられて、最も深根なルーサンの作付面積が、各国共に増大の趨勢を示している。

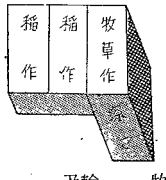
禾穀作など普通食料作の根深は三〇糎内外であるから、その連作は土壌の浅層だけを酷使する農業であるし、稔熟が気象や地勢に制限されるので、生産性の発展がないが、多根、深根の牧草作を加入するほど、多年作的な関係と根深が土壌の深層に達することによって深層まで利用できるし、不稔作のため気象や地勢を克服して農地が拡張するので、生産性の発展が期待されるところに、牧草農業の振興が、世界的な趨勢で勃興してきた。

ルーサンは根深四～五㍍に達する唯一の作物であるから、ギリシャ時代からローマ時代を経て、全世界に拡がり、牧草の王者といわれているが、むしろ農作物の王者であって、その分布の広汎なこと、品種の多いことなどは、他の作物に匹敵するものがないほどである。ルーサンに次いでクロバーの根深一～二㍍に及ぶことが、またその分布や品種を増大し、全世界に拡がったゆえんである。

明治維新以降西洋文明の進入によって我国の文化が著しく進み、工業では徳川時代の家庭工業から現代の大中小の工場に発展したが、農業では相変らず伝統の穀菽農地の基盤を継承し、これを改良しただけで、酪農でさえその基盤内に割り込んで進んだに過ぎず、牧草農業の飼料基地的発展を遅滞させた。西洋農業が国土の六～八割まで開拓していることは、牧草農業に由来するのであるが、我国ではこれを推進しなかったため、今なお国土の二割以下の農地しか開拓が進んでいない。その上、この二割以下の農地の浅層三〇糎内外を利用するだけで、深層を全く使っていないから、農地が狭いばかりでなく、至って薄い営農である。

だから我国ではまず厚い営農を振興することが擡頭して、牧草輪作が耕地帯に導入せられたが、水田酪農でも裏作では真価があがらず、今や田畑転換酪農が擡頭して、はじめて米産と酪農とが総合生産効果をあげうるような端緒が各地で勃興してきた。

牧草輪作導入の困難な水田にこのような輪作が進んできたので、導入しやすい畑作地帯には躍進の兆がある。

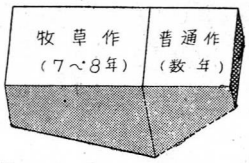


かくして牧草導入が短期輪作として営農効果をあげるが、自由諸国では耕地の短期輪作からさらに長期輪作に進んで、七～八年牧草作、数年穀菽作という形式で、牧草根効果を波状地、低温地などに推進し、これによって起る土壌の深層組織の改善と、肥沃度、保水度の増進とに関連して、輪換の初期に根菜類（ビート）、球根類（花弁）を栽培し、牧草輪作の経営効果を一層向上した。

さらにこの農法は傾斜地に向って進められ、傾斜地農業を振興し、また粗牧地の草生、草種、草地の改良を躍進し、半不毛地（荒原）、不毛地（砂漠）にまで農業を推進し、

牧草と園芸　四月号　目次

◇表紙写真　春は種苗の店先から（雪印種苗直売所）
◇自由、共産両陣営とわが国の酪農問題…田垣住雄…二
◇開拓営農七ヵ年の実績……組沢四郎…五
◇続々花木漫録……原　秀雄…七
◇寒地における結球白菜のトンネル栽培…中原忠夫…八
◇暖地における水稲早期跡地の青刈飼料栽培法…水島　隆…一一
◇道南の果樹……白金　茂…一四
◇季節の作業…果樹、飼料作物、蔬菜……一七



↑麦其他普通作後再び牧草作
↑牧草作の土地生産性及び労働生産性を著しく向上
↑作効果を発揮
↑輪換初期：根菜作、球根作
↑長期牧草作によつて過湿過沃化すると、草生に悪影響を及ぼすので
↑土壌の保全改良、土地能力の高度利用向上
↑牧草の長期作効果を充分に更新する
↑発揮

最近二〇～三〇年の間に土地改良保全用の牧草として、ラブグラス、フェスクなどの禾本科草、ジャパンクロバー（ヤハズソウ）、クズなどの荳科草が擡頭した。砂、シルトの土壌に牧草を定着し、粘土と腐植とが増成するにつれ地力が発達するから、この牧草導入に基づく生物学的土地改良が、新しい農地の拡張政策として、競つて採用される段階に進んだ。

この段階では機械化、技術化が躍進し、零細規模を滅滅し、それぞれその国情に適わしい一定の適正規模が生まれてきたが、我国では零細規模を適正化するため、共同態勢、法人組織などの問題が擡頭してきた。

2　共産陣営の酪農

ソ連は集団農業共産組織を採用したが、スターリン時代には畜産が思うように伸びないため、スターリン自らが「畜産は家族労働が良い」と見解して、家畜の私有を認めたので、今では私有家畜が増し、乳牛、豚、家兎、家禽、蜜蜂などおびただしい数に上り、昨年夏にはフルシチョフがこの反社会主義的傾向を問題にするに至つて、畜産は伸ばしたいが私有は制限したいというジレンマになやむようになつた。

そこで、第一に採つた政策が、都市附近の私有家畜禁止の制令であつて、これを動機としてソウホーズ、コルホーズの私有家畜をも抑制しようとしているが、まずここで都市附近の私有家畜禁止の趣旨とその目的とを明かにして置きたい。

飼料基盤を持たぬ都市附近の家畜飼育は、購買飼料を主体にする零細私有であるから設備も不良である。従つてこのような原始的飼育では、食料を混乱し、都市衛生を悪化し、乳産では不衛生に流れ、その上に共産労務の協力を減ずるので、今や集団農業地帯の生産態勢が進んで、乳肉の生産が進歩的に改善された現状では、これらの原始的飼育を中止して、進歩的な集団農業地区に移す必要がある。この趣旨に基づいて都市附近の私有家畜は、一～二年の間に指定価格でソウホーズまたコルホーズで買収し、この期間内に実行しない場合には、従来の安い買上価格で没収するというのが、概略の内容である。

3　零細酪農の整備及び整理

自由圏では零細飼育を草地帯開拓で整備し、これに遅れた我国では共営組織を考えているが、共産圏では零細私有飼育を共産経営内に抱擁せんとしている。

しかし、ここで見のがし難いことは、ソ連共営圏では従来畜産不振のため、主義に反してまで私有を認めたことによつて、漸く畜産が振興し、乳牛などは私有が半数くらいに達しているのであるから、これを共営に移したならば、せつかく振興したものが破綻を来すおそれのあることである。従つてさすがのフルシチョフもこの政策をとるまでには頭をなやまし、その反抗をおそれているし、またその実行でも強圧的な手段を充分に戒めている。

元来、家畜飼育ということは共営ではむつかしく、家族労働的な私営が適していることを認識しながら、共産主義的な成功を目ざしている点に、共産圏の特色がある。

これに反して自由圏では、資本の偏頗あるいは能力の優劣によつて、大中小の自由な経営が発達するが、零細では経営の改善ができないため、これを整備しあるいは合同して、大中小経営のバランスを組織建てようとするのが目的であつて、共同経営自体においても、零細な個人有よりも自由主義的な成功を目ざしている点に自由圏の特色がある。

4　我国酪農の課題

我国の酪農は一～二頭の乳牛を飼育する零細経営がまだ大部を占め、最近数頭から十数頭を飼育する小経営、及び十数頭以上を飼育する中経営が相当に発展したが、数十頭以上を飼育する大経営は至つて少ない。

我国に零細酪農の多いゆえんは、酪農が食料基地に割り込んで発達したためであつて、食料基地そのものが既に零細化しているところへ有畜形態を推進し、副産的経営を主体にしたことに由来している。

酪農は元来飼料基地に添つて主畜経営的に発展するのであるが、牧草作の習慣のない穀菽作主体の伝統によつて、従来から食料基地に匹敵するほどの草地面積を利用していたにかかわらず、野草の利用だけに止まつて、草生改良、草地農業を推進し得なかつた点に、飼料基盤の開拓が遅れ、酪農零細化への道程を辿るに至つた。

山岳国でありながら、至つて乏しい平地農業に固着し、裾野、波状丘陵地、起伏地に発展すべき傾斜地農業が勃興せず、河川国でありながら、河岸流域の沃地だけ開拓して静水清水工作を怠り、海浜国でありながら海岸線砂丘地の開拓を怠り、これらの地帯を雑灌木雑草地として放任し、年々洪水の氾濫、濁水の流失を繰り返していることは、牧草農業不振の現実な姿である。

零細な食料基地営農に地力維持改善のため牧草輪作を導入することは、この零細農業の保全のため、または静水清水工作のため、重要な施策であるが、零細規模である限り、零細酪農しか振興しない。

零細酪農の非は既に共産、自由両陣営共に認めるところであつて、これを整備または整理せんとする傾向にあるとき、食料基地酪農の推進だけでは意義がない。そこで飼料基地開拓の問題が重要課題になるのであるが、開拓余地の乏しい地域では、合同問題が擡頭するのである。

米作主軸の農業を第一次開拓と見るならば、牧草主軸の農業が第二次開拓と見るべきものであつて、そこに農政の大きな転換が勃興し、開拓方式も営農方式も従来の第

一次農業とは全く違つた第二次農業が推進せられ、従来開拓できなかつた地帯にまで農業経営力が伸びなければならぬが、農地法、森林法、牧野法など第一次開拓時代の法制では、そんな農業の発達を目途としていないから、第二次農政推進のためにはまず法制の改革が必要である。

5　酪農政策の重点

酪農の発展は零細酪農の奨励でなく、適正規模の酪農の建設であるから、酪農政策の重点もまたこの点にある。

乳産をしても赤字になる酪農では推進しても意義がない。従来無畜農家に対する有畜対策として貸付牛を配当したようなことは、飼料基盤の乏しい農家が無畜形態にある場合が多いので、あまり効果をあげていない。むしろ落農かあるいは零細酪農かへの道に過ぎない。また乳汁の需要が増すにつれて乳業家が、都市乳業から農村乳業へと歩を進めたが、飼料基盤の乏しいところへ現金収入をめあてに推進したので、購買飼料に依存する零細酪農が都市附近からだんだん農村にまで普及した。それ故、大部の酪農が零細形態で進んだが、この大部の酪農副業家及び購買飼料依存の乳産家は、乳代の高価なことと、飼料代の安いこととをあてにしてやつているから、常に乳業会社と飼料会社との商策にあやつられている。

我国の酪農問題では、この零細酪農家または乳産家が大部を占めるので、乳業会社や飼料会社との商策的な課題が主体になつて、酪農家よりもこれら関係会社の意欲の方が盛り上がり、農業政策よりも商業政策的な色彩が強く、酪農政策というよりも酪商政策と見られるような傾向がある。従つて酪農対策費まで農業の基本よりも、その商策的投資に傾き、零細酪農救済に偏重する傾向がある。

しかしこの零細酪農政策は、当面の過渡的対策であつて、これが酪農の本質的政策でないことは、世界の趨勢から考えられることであつて、こんな対策だけに没頭し、また全力を傾注するようなことは、酪農の健全政策ではない。

酪農はエキステンシーブ及びインテンシーブの農業の拡大と集約とを目的とし、乳肉産がこれに附随して勃興するところに、農政的発展があるのであるから、エキステンシーブに草地を開拓し、インテンシーブに牧草作を導入することが要件であつて、この飼料自給力の向上に応じて飼育を振興し、営農の総生産力を増大するのが目標である。アグリカルチュアが主体で、牧草農業の耕作技術がカルチュア（文化）を進め、これに伴つてアグリビジネス（経済）の振興を図るのが、農村文化経済を向上する酪農政策の健全対策である。

昨年の調査によると乳代に対する購買飼料代の割合が、地方平均で三〇％から六五％という大きな開きがある。このような大きな経営上の開きのある酪農政策を、一本の政策で兎や角することは、不可能な問題であつて、我国でも購買飼料依存度の高い零細酪農は、奨励するよりもむしろ抑制すべき時代であつて、徒らに基盤の薄弱なものを維持するよりも、基盤のしつかりした適正酪農の確立に向つて、政策を集中すべき時代であろう。

乳産、肉産の増進は乳産業、肉産業の振興を示すのであるが、酪農の振興では農家の経営力が振興し、その経済力が発展しなければならぬ。酪農家には如実にこれを示すものもあるが、大部の零細酪家では繁栄が見られず、これに較べ、むしろ乳業会社や飼料会社にだけ繁栄が見られるようでは、酪農政策とはいえない。

前々農林大臣時代に草資源調査会が発足し、前大臣時代に畑作振興、現大臣時代になつて農業基盤の拡張に農政が打ち出されたことは、何れも一貫する農政転換の線であつて、これが酪農推進の基本的政策である。政治的には既にこのような見解が確立しているのであるが、まだ第一次農政を基本とする行政組織や農業指導形態が根幹を礎いているので、第二次農政的発展が遅々としているところに、旧態を改め難い隘路が横わつている。

それでも、最近数年の間に相当浸透してきたし、成果もだんだん目に付くようになつたので、年を経るにつれて酪農の健全態勢が進んでくるものと、見透されるようになつたことは喜ぶべき現象である。

（草地農業研究家）

種苗トピックス

今月より牧草と園芸誌の一角に本欄を設け、弊社が業界に誇る農場並びに技術陣の成果を毎月皆様にお伝えすることといたしました。この小欄が読者の方々の待望の欄になるよう努力いたしたいと存じます。

さて今月は弊社上野幌育種場で永年の努力により完成いたしました南瓜の一代交配種「平型美園南瓜」を登場させましよう。

この南瓜は従来最も早熟といわれた「バターカップ」をさらに改良して、本種の早熟性と優れた甘味とを、節成で澱粉質が多くポクポクとした多果性の美園デリシャスに交配して作出したもので、在来種より遙かに早熟で果はバターカップのように小さくなく食味すこぶる良好で市場受けのする適当の大きさをもつたものです。

弊社の調査によりますと、開花後収穫までの日数は美園デリシャスで五十日、バターカップで二十日位ですが平型美園南瓜は、二十二日となつています。一個の果重は、バターカップの一・三キロ瓩に比し二・五キロ瓩で遙かに大きく、従つて反収も多いようです。着果節位も低く、七～八節目から二～三節毎に着果し、主枝四尺くらいの長さに十個くらい着果成熟いたします。果皮は黒色、過形は平型で荷造り輸送にも便利です。

最近南瓜は主食の域から脱したとはいえ北海道の秋の味覚としてトウモロコシとともに大いに賞味さるべきものであります。本春の種子販売価格は次のとおりです。

一代交配**平型美園南瓜**　一袋一〇〇円　一デシ五〇〇円